

第4回養殖業成長産業化推進協議会 議事録要旨

日 時：令和2年3月10日（火）13：30～15：00

場 所：TKP神田ビジネスセンター ANNEX ホール8 I

出席者（敬称略）：

委 員：馬場治、佐野雅昭、有路昌彦、山下裕子、長元信男、三浦秀樹、
鶴岡比呂志（代理）、伊藤暁、青野英明、村尾芳久、大泉裕樹、
今野尚志、村上春二、長岡英典、朽木一彦

水産庁増殖推進部：黒萩真悟、藤井徹生

水産庁栽培養殖課：藤田仁司、中井忍、古賀一郎、武部孝行、唐川奈々絵

農林水産省消費・安全局水産安全室：中里智子

オブザーバー：佐々木義弥

事務局：麓貴光、松永紗弥、中平博史、衣川和宏

議 題：

- 1) 第3回協議会の意見について（報告）
- 2) 養殖業成長産業化総合戦略（仮称）について（協議）
- 3) 養殖業成長産業化総合戦略（仮称）の今後のスケジュールについて（報告）
- 4) 連絡事項（報告）

・水産庁挨拶の後、馬場治委員長を座長に議事に入る。

1) 第3回協議会の意見について（報告）

◆事務局より資料1「第3回養殖業成長産業化推進協議会 議事録要旨」に基づき説明。

2) 養殖業成長産業化総合戦略（仮称）について（協議）

◆水産庁より資料2「養殖業成長産業化総合戦略（仮称）の骨子（案）」、資料3「養殖業成長産業化総合戦略（仮称）の素案」に基づき説明。

【委員からの意見】

佐野：資料3の16、17ページに、餌の名称としてDPとあるが、EPではないか。19ページに、MELとあるが、AELの誤りではないか。31ページの四定条件というのは、質というより供給の条件を指している。むしろ日本でしかできない鮮度感や味といった商品価値のコアの部分をより追求した生産を目指すべき。

有路：これまでの協議で、例えば、ブリ類・マダイ類であれば、ミドル～アッパーを狙ったマスマーケティングが理想的といった議論をしたはずだが、資料3の31ページにおいては、商品のターゲット市場について記載がない。また、33ページ以降に多くの施策が記載されているが、優先順位はどうなっているのか。重要な施策については強調するべき。また、ISO22000と記載があるが第三者認証というのであればFSSC22000のほうではないか。またJFSのC基準等についても記載してはどう

か。

山下：参考資料の18ページの「市場・取引の動向」で、付加価値をどうやって出していくかという話があったが、鮮魚と冷凍ではマーケットが違い、訴求ポイントも違って来る。量の目標を増やすのは良いが、量を増やすために冷凍の低価格品を出して良いのか。さらに、量を増やす事によるエサや抗生物質の環境負荷は問題ないのか等、デメリットがあるのであれば、それに対してどう対策するのか記載して頂きたい。

藤田：DPに関しては、正しい表記を確認して対応したい。MELについては実際にGSSIに承認されたのはMELのバージョン2なので、MELで合っている。質の問題については資料3の33ページの第5の2の養殖生産物の新たな需要創出・市場獲得の推進の所で説明している。品目毎に関係者や課題が違うので、来年度は品目毎に関係する方に集まって頂き、取り組める内容、優先順位を含めて議論したいと考えている。環境への配慮については、現在、魚類養殖は持続的養殖生産確保法に基づく漁場改善計画に従って漁場計画を策定し、生産されており、しっかり漁場改善計画の基準を見直したうえで、環境に負荷をかけない範囲で増産をしていくものと考えている。それから薬の使用をできるだけ減らす為にワクチン開発に取り組むことに言及している。

有路：資料3の33ページの2の最初の○の所は、これはプロダクト・アウトの発言ではないか。マーケット・インでいくというのであれば、日本の水産物の良さを活かせる生食可能なマーケットに切り込みたい、となるのでは。生鮮で送るのかフローズンで送るのかとなった時に、それぞれどういう課題があってどう解決したら良いのか、記載して欲しい。

佐野：MELの所は、養殖の話をしているので、AELについても書いた方が良いのではないか。

長岡：AELは、MEL ジャパンと統合する話が出ている。MEL ジャパンがGSSIに承認されたのは漁業のバージョン2、流通加工のバージョン2、養殖のバージョン1。本当はそれを明確にしなければならないが、GSSIから表現をするときはバージョン2というように指示があった。来年1月までの移行期間のみの措置になっている。従って、記載についてはこれで良いのではないか。資料3の29ページには認定を受けたとあるが、14ページには承認を受けたとある。参考資料の23ページには認定と書いてある。エコラベルの世界では認定と承認が違う意味で使われているので、承認で統一をしてほしい。

佐野：四定条件については、作ったものを市場に出していく時の目標で、サプライチェーンの課題という意味で追求されるべき。生産の方向が四定条件になると、これからそういうのをやるのか、と思われかねない。機械的な機能的な要素がグローバルな技術なので、特段日本だから勝てるというものでもない。日本だからというのであれば、国内市場に向けた高鮮度活〆や活魚出荷など、より価値の高いものとして出していく、そういう養殖を作るということではなかったのか。さらに健康とか栄養とかを含める形で養殖魚の価値を上げるということを表の中に記載した方が良いのではないか。

三浦：日本の養殖の良い所は、多種多様であって色々な餌を使いながら、例えばフルーツを入れたりして、色々な進化を遂げて味を変えてきた。また、天然に近い魚であったり、脂ののった太った魚であったり、大きさも変えてきた。一方、ノルウェーやチリは一種類で、定時、定量そして定価格のものを大量に作って、世界に売っている。それが養殖の始まりの頃であれば日本のブリでもできると思うが、ここまで進化してきたものをまた集約して世界に打って出る、というのはなかなか難しいと考えている。国内市場で受け入れられている日本が培ってきた技術を一緒に輸出することを考えていくことが必要。そのためには、どこをターゲットに、どういう風に販売していくのが重要。生でも冷凍でも刺身でいけるという刺身食材としての利点をもっと前面に出していくべき。定時・定量・定価格というイメージになると量販店に大量に売るというイメージになる。世界的にはそういう所を目指すのかもしれないが、今はアッパーからミドルにかけて、それからその国の料理に使ってもらえるような食材とすることを前提として整理をしてきたのではないか。

有路：全体の構成で考えていただきたいことがある。日本の養殖業が海外へ輸出して、成長するためにやらないといけないことは、生産性の向上と販売力の強化、マーケティングの強化になるというのは今までの議論で出ていたが、そういった流れがわかるような構成でないと戦略としてはわかりにくいのではないか。また、それぞれの中で、生産性の向上については重要なポイントがまとまっていない。生産性の向上で一番重要なことは飼料効率の追求。そのために、育種の話や餌自体の話も出てくる。ノルウェーや海外のものを学ぼうと思ったときに、彼らは決して質を落とさずに生産性を向上している。また、ワクチンを重視しないといけないのは、単に耐性菌の問題があるからではなく、それも生産性の向上のためで、国際的な流れ。

黒萩：これは全体の総合戦略であって、ここからつまんでいくもの。資料3の32ページにフォローアップの実施とあり、魚種ごとに行動計画を立てていくというのが、来年度からのこの協議会の仕事になる。そうすると今はいろんな魚種をイメージして発言されているが、全部に当てはまるものではないものが結構多い。魚種別に行動計画を立てていくことで整理がされていくと思っている。今後指摘頂いた内容に関しては手直ししながらやっていきたいが、様々なプロセスと調整を経た上でここまでできたので、構成自体を変えていくのは難しい。行動計画の中でしっかりやっていければと思う。

有路：それであれば資料3の32ページにこれから議論するのは「こんなイメージだ」というのを入れられないか。

藤田：資料3の33ページ以降に位置付けが分かるような内容にしたい。

大泉：資料4の14番に書いたことだが、戦略書としての章立てになっていないため、内容がなかなか頭に入って来なくて苦労している。新しいことをやってもらうには、何が結論か、その論拠は何か、どうやってやるのかを明確に記述することが大事なのではないか。例えば資料3の第4の基本戦略が結論であればその箇所だけ読んでも、今までと何をどう変えていくのかということだけは一目でわかるように踏み込んで書かないと、戦略はなかなか実行されないのではないか。

朽木：今回の総合戦略は、広く世の中に知らしめることが大事。そのためには見せ方を工

夫する必要がある。大泉委員がおっしゃるように、背景・結論・戦略という基本項目に従ってまとめるとか、簡略にエッセンスをまとめるとか、ポンチ絵を作るなどしたほうがよい。ここまでまとめられているので大幅に修正するのが難しければ、少なくとも周知のためのポンチ絵は作成すべき。

黒萩：どうしても役所で作る資料は、まず文章を完成させるというのが先に出てしまう。こういう仕組みなんだなというのはよく読み込まないと理解できない。それを一般国民に求めるというのはあり得ない話であって、分かりやすい形でグラフと図、フロー、ここでやってきたことの完成版みたいなものを作成して公表するのが極めて重要だと思う。魚種毎にはきめ細かにどういう立場の人がどういう事をやっていくのかをしっかりと定めていって、プレゼン用のものを作っていき事必要だと思っているので、そのような形で取り組んでいきたい。

長元：養殖の現場は非常に厳しい状況で、養殖業者はピーク時の半分以下になっている。また、最近はコロナウイルスの影響で出荷がかなり減っており、更に厳しい状況に置かれている。魚類養殖業はこれから伸びると言われているが、餌の問題、輸出の仕組みを含めて、検討をお願いしたい。

鶴岡：来年度以降5品目に分けてこれから戦略を描いていくという話だが、基本的にはマーケットに合わせて戦略を描くということになるので、これから始まる話だと思う。協議会全体で方向性が確認できたと理解している。資料3の31ページは、方向性が限定的になってしまって検討の範囲が狭くなってしまうと、来年度以降やりにくくなる。成長戦略の方向性は日本のマーケットに合わせて高品質なものをできるだけ低コストで作って最終的には産業全体が大きくなることを描いた戦略だと理解している。

伊藤：資料3の31ページについて、戦略的養殖品目の中で、人工種苗が確立しているのは、サケ・マス、タイだけで、ブリ・カンパチ・マグロはまだ天然種苗に頼っている。人工種苗の開発は絶対に必要。37ページの研究開発の部分は、水産研究・教育機構が中心になって、どういう対策で臨むか書かれているが、34ページからの持続的な養殖生産の推進の「生産性・収益性等の向上」に同じような形で品種改良の文言があるが、これは誰がやるのかというのが分かりづらい。魚種別に取り組む中では、もう少し分かりやすくしていただきたい。

青野：内容については、国内の分析から海外の分析まであって、戦略としては良いのではないか。ただ、来年度以降の品目別の戦略については、委員の意見も参考にさせていただき、分かりやすい内容に作っていただければ良い。

村尾：資料3の29ページの「マーケット・イン型養殖業の推進と将来めざす姿」という所を読んで感じたことは、基本的にプロダクト・アウトではないという事でこの記述になっていると思うが、2030年もしくはそれ以降に目を向けた時の消費者の商品の選び方、興味のあり方は、この2、3年、例えば使っている餌がどうだとか、育てている環境がどうか、それぞれの志向が美味しい、まずいだけではなく、どういう所でどういう風に育てられたものだから自分は買いたいとか、マーケット・イン的な発想とはだいぶ変わってきている。これからのマーケット・インという観点からみても、ライフスタイルの価値観が多様化する中で、育てられた環境、使用

された餌、その事業に従事している人の満足度等の情報が、消費者に提供され、購買判断に強く関わるので、この様なことについての透明性が重要になるということも、マーケットインの内容と理解して進めて頂きたい。

今野：36ページに、「販売事業者が養殖経営体に対し餌等の生産資材を供給し市場のニーズを踏まえた養殖品目の委託生産し販売すること等」と書かれており、地方の荷受けが餌を養殖事業者に売って、魚で回収するという仕組みがあったと理解しているが、今後はこの仕組みは成り立たないのではないかと思っている。販売事業者が量販店や大手の寿司チェーンとすると、そういった会社が餌や養殖資材を買って、養殖事業者に販売するということが出来るのだろうか、という疑問を持った。関係している方に議論をしていただきたい。

村上：今後の品目別の議論の中で、議論を進めていただきたいと思う点をいくつか述べると、マーケット・イン型の議論を高める中で、北米やヨーロッパの市場に対して輸出を強化して行こうと考えた場合に、労働問題や人権問題に加えどういった餌を使っているか、また持続可能性は担保されているのか、などの透明性およびトレーサビリティの確保についても具体的に品目別で議論するべきではないか。そして品目別の話を進める中で、成長戦略に乗れる養殖業者とできない業者が出てくると思うが、乗れない方々をどう取り残さないように一緒に成長していくのかという点に関しても非常に重要だと思うので触れるべきだと考える。それから成長戦略を作る上で、今、大きなビジョンがあってゴールがあるというのが、共通の認識だと思うが、品目別にどういったゴールを定めて、どういったマイルストーン、アウトカムズを定めて、それに紐づくアクションはそれぞれのセグメントがどういった事をしていかないといけないのかということ全てが織り込まれて戦略となると考えるので今後の議論に含めていきたい。

長岡：水産エコラベルについて、GSSIの承認を受け続けるのは並大抵のことではないが一生懸命努力をしていきたい。

馬場：戦略策定を受けて品目別の協議が始まるということで、そこに預ける部分が大いとは思うが、戦略の部分が見えにくいというご意見をいただいた。一方で、成長産業化を進める取り組み内容については様々なことが書き込まれていて、戦略が立てられた上でこういう取り組みをしていくという事になるのであろうが、個人的に考えているのは、今までの持続的養殖生産確保法で定められている適正養殖生産数量が過去の実績ベースであると同時に、毎年議論している生産目標ガイドラインを裏付けるものになっている。ただ実際に現場を色々と調査していると、漁場に空きが出てきて、その結果として病気が発生しにくくなって、投薬が大幅に減っているという事例を何度か聞いている。ただ、それをそのまま放置しておく、生産量の維持ともマッチしなくなるので、このあたりをどのように見直していくのかは、大きな考え方に立たざるを得ないのではないかと。ノルウェーのように養殖ライセンス一件当たりのバイオマスで許可するのか、あるいは環境とのバランスをどう取るのかというのは非常に大きな問題になると思う。今日、皆様のご意見を頂いて、できる限りこれが反映されればと思うし、大きな戦略の変更がこれからあるとは考えづらいが、字句の修正等も含めて、水産庁側で最終的な戦略の策定に向けてご検討い

ただくことになると思う。その場合、仮に大きな変更が生じた場合には、改めて集まっていたくのは難しいので、場合によってはメール審議になると思うが、マイナーな修正等については座長に一任していただきたい。

★了承

3) 養殖業成長産業化総合戦略（仮称）の今後のスケジュールについて（報告）

藤田：今後のスケジュールについて、パブリックコメントを募集し、4月以降に最終版を策定する。また、来年度以降は藻類・貝類についても議論を進め、各部会において行動計画を検討していく。

馬場：戦略と謳っているが、目標のようなものになっており、戦略については来年度以降の各部会で策定すると認識している。

4) 連絡事項（報告）

◆事務局より議事録要旨作成について説明。

大泉：今回はあくまでも大枠の戦略ということで、これから品目毎に戦略を立てるからあまり具体的にやるべきことを定めることはできないとおっしゃったが、資料3の33ページ以降の施策は結構細かいことが書いてある。戦略はやるべきことを絞る事でもあると思うが、33ページ以降にあるのはこれから品目毎に戦略を立てるためのメニュー集であって、全てをやるわけではないということで間違いないか。

藤田：間違いない。例えば、クロマグロであれば人工種苗の評価が低いですが、そういった所を集中しないといけないし、マダイでは人工種苗はしっかりできているので、違った観点でのアプローチになる。

有路：国内の生産者は質の良いものを作って消費者に買ってもらっているということだが、全ての生産者が良いものを作っているか、また、継続して作り続けているかという経済学的視点で考えるとなかなかそれは簡単ではない。結局レモンマーケットだという事実は認識した上で、どのようにしていけば消費者の気持ちを得たマーケット・イン型の対応ができるのか、かなり整理して議論しまとめないといけない。また、生産量のコントロールという考え方について、作りすぎによって価格が下がるから作りすぎないようにしましょうという話がずっとあるが、足りなさ過ぎて棚が縮小してしまったという状況が起こると、次の年あるいはその次の年に大ダメージが来るというのを養殖業は何度も繰り返している。棚を縮小させない取り組みについても、引き続き個別の部会等で検討すべき。

黒萩：養殖業を成長産業化していくという事を考えた時に、色んな立場の人たちがいる、入口から出口、外国までいるということで、とにかく皆さんの声を聞いて総合戦略を作っていかなければいけないと思って、この仕組みを作った。いろんな立場があるため、まとまらないのではないかと考えていたが、一つのまとまった形が出来てきたというのは有難い話。今後は行動計画を策定していく。行動計画を策定する時に改めて国内向け、国外向けをどう仕分けていって、本当の意味でのマーケット・インとは何ぞやというのを品目別に考えていかないといけない。色々と当初から参加していただいた方々には、このプロセスも十分お分かりの事だと思うので、引き

続きご協力をよろしくお願ひしたい。総合戦略ができた結果、これから生産数量ガイドラインを国内向けにどういう風にして、売り場の棚を失うガイドラインではまずいというのがあって、そこをどう考えていくかとか、環境収容力を漁場改善計画にどう結び付けていくかという話、それから漁場改善計画の中に生産履歴をしっかり位置付けていくべきではないかとか、輸出に打って出るとなったら、輸出が滞った場合に備えて、収入安定対策・積立ふらすにより、国内に出している人たちにどのようにリスク回避していくかということに合わせて考えていかないといけない。来年度以降は、そのような制度をどう考えていくかという時にこの総合戦略が一つの基軸になっていく。それに行動計画で予算的支援、制度的支援をどう組み合わせしていくかという事になっていくと思うので引き続きよろしくお願ひしたい。

閉会。